

第1章. 文明とは、歴史とは、これをどのように理解するか

1. 1. 文明をどのように理解するか

文明というものをどのように理解するか。広く受け容れられている認識、あるいは定義の代表的なものを上げてみると、次のようになる。

- ・文明の発生には、その前提として農耕による食料生産と、それによる余剰農産物の存在が必要だ。
- ・文明と非文明とを対比させて浮かび上がる文明の特徴には、次のようなものがある。
 - *効果的な食料生産
 - *都市
 - *記念碑的公共建造物
 - *大きな人口
 - *冶金術
 - *合理科学の発達
 - *職業と階級の分化
 - *文字
 - *支配的な芸術様式
- ・文明を機構として捉えると、次の見方ができる。
 - *大きな人口を維持するためには、食料生産と分配の仕組みと制度が必要であり、これを可能にする政治システムを持つ社会、即ち国家という社会こそが文明だ。
 - *色々な文化が存在する状態で、それぞれの文化をサブシステムとして包含する広域的ネットワークこそが文明だ。そこには大規模な組織、制度などの統合がなされている。
- ・アーノルド・トインビーは文明を次のように定義した。
 - *文明とは、個人が強く識別する、最も広範囲なアイデンティティに相当し、家族・部族・故郷・国家・地域などよりも広い、強固な文化的同一性である。
 - *多くの文明への「挑戦と応戦」の過程で、文明は発生し、興隆し、やがて終末を迎える。文明の終末において、新たな文明を生む繭が生まれ、古い文明を崩して文明を再生する。
- ・トインビーの定義には、文明の生成と興亡のことも含まれている。そしてこれは、文明を論じる際に絶対に外すことのできない要素でもあり、さらに、文明と歴史との関わりを示唆している

このように認識される文明は、人間が生きる世界の最大の構成要素であり、間違いなく人間が、それも集団としての人間が生み出すものである。

こうした文明はその構成要素として、統治システム、経済社会システム、教育システム、科学・工学や文学などの学問体系、といったものを持ち、これらのシステムや体系の生成物としての都市、インフラ、施設・設備、商品やサービス、といったものをも擁している。

文明は或る地域の或る時代における環境のもとで生み出され、定義付けられる。時の流れと環境の変化は既存の文明に影響を及ぼし、文明に発展や衰退をもたらすと同時に、新しい文明を生成する力を育む温床の役割をも持つ。

また、文明自体も環境に変化をもたらすと同時に、文明の下にある人間と人間集団に対して影響を及ぼし、人々の意識を変えていく。文明の下で影響を受けた人間と人間集団は、変化した環境の下で既存の文明を変化させたり、新しい文明を生み出したりする。

時代や環境の変化と文明の変化、そして人間の意識と行動の変化との間にはこうした関係が存在する。

こうした理解に基づいて言えることは、文明とは集団としての人間の生き様であり、その生成物であるということだ。その生成物とは、遺跡や遺産として残る有形のものもあれば、思想や学問のような無形のものもある。人間関係が作り出す社会もまた文明であり、人間の生き様を表している。

やや影響力が下がったとは言え、未だに世界に支配的な力を及ぼしている西欧近代主義は、西欧近代主義文明と呼ぶに相応しい。現代の世界には西ヨーロッパ、東ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカ、東アジア、南アジア、中央アジア、西アジア、北アフリカ、中央アフリカ、南アフリカ等々、多様な文化が存在するが、それぞれの地域の人々の動きや志向に注目すると、西欧近代主義こそがそれぞれの文化をサブシステムとして包含する広域的ネットワークだと言える。

トインビーの言葉で言うならば、現代において個人が識別する最も広範囲なアイデンティティに相当するものは、西欧近代主義を置いて他には存在しないと言えるだろう。

1. 2. 歴史をどのように理解するか

歴史とは人間が生きる世界に関するものであるが、時代の流れや環境の変化の中で発生した事実を忠実に記録したものという範囲を超えている。日本と中国との間で歴史認識の違いが問題となっている。また、日本と韓国との間でも同様のことが起こっている。他にもこうした問題の発生を見出すことができる。

現代の国際社会の下で起こっている、このような国家間の歴史認識問題が、事実の記録と歴史とが異なるものであることを立証している。事実の記録と歴史が異なる事例は過去をたどってみると、多々存在する。

身近な例を挙げてみよう。史上初めて世界一周を成し遂げたのはマゼランとされ、日本の世界史の教科書にもそう記されていた。しかし、多くの研究結果が示すところでは、史上初の世界一周航海は中国人によってなされたというのが正しいようだ。

こうしたことが起こるのは、研究が深まっていないことも一因であろうが、近世・近代に入って以降、文明の大勢が西欧近代主義の支配するところとなり、西欧近代主義を基盤にした歴史認識が優勢だったことが主因だと言ってもよいだろう。

このような歴史認識と事実との齟齬は、文明の発祥に関しても浮かび上がっている。私たちが教育を受けた1950年代や60年代には、世界四大文明の発祥が語られ、メソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明、黄河文明が上げられていた。ところが新しい研究では、四大文明ではなく四大河文明と呼ぶのが適切だとされ、中米のメソアメリカ文明、南米のアンデス文明を加えて、六大文明と呼ぶことが提唱されている。

また、ジャレド・ダイヤモンド氏の著書「銃・病原菌・鉄」によれば、文明の発祥は食料生産に始まるとされ、そこにはニューギニア、ポリネシア、オセアニアも登場してくる。文明の発祥こそが歴史の始まりだと受け止めれば、歴史の流れとして従来とは異なったものが浮かび上がってくる。

日本の縄文時代には食料生産の記録や証拠となるものが見当たらないため、これを文明と呼ぶことができないのだろう。縄文文化と呼ぶにとどめているのはそのことゆえだろうと思われる。

近世・近代の歴史哲学に注目してみよう。ヘーゲルもマルクスも、そして新しいところではトインビーも、過去だけに目を向けているのではない。明らかに未来に向けた視線を持っている。歴史とは発生した事実を忠実に記録したものではないということが、こうしたことにも現れている。

かつて哲学者のサルトルと文化人類学者のレヴィ=ストロースとの間で、歴史に関する有名な論争があった。その概要は次の通りである。

サルトルは歴史を一本の流れとして捉えた。即ち、いわゆる“未開人類”は将来、歴史の流れの中で西欧社会の人類と同種の文明を持つようになると考えていたようだ。これには、当時の思想界で優勢であった史的唯物論の影響もあった。

即ち、“未開人類”と西欧社会の人類とを歴史の同じ段階にあるものとして捉えることができなかったのだ。言い換えれば、西欧近代主義的な意味での歴史は西欧固有の現れ方をしているものであると受け止めることができなかったのだ。

“未開人類”の社会と西欧近代社会とには同一の構造を持っている部分があることにレヴィ・ストロースが気付いたことが、サルトルの歴史観を否定することになった。「歴史なんて本当にあるの？」というような意味の問い掛けを、レヴィ・ストロースがサルトルに向かってしているのは、サルトル流に考える歴史など有りはしないということの表現であり、歴史を否定したわけではない。

室町幕府の終焉について、安倍龍太郎氏が小説「家康」に次のように記している。

こうした社会構造の変化に、農業を中心とした室町幕府の守護大名は対応できず、いち早く経済、流通を支配した戦国大名が台頭していく。

そのチャンピオンとも言うべき者が二人いる。一人は尾張下四郡の奉行の家に生まれ、伊勢湾や琵琶湖の流通を掌握して天下取りをめざす織田信長。

もう一人は安芸吉田郡山城の城主から身を起し、博多港や石見銀山を支配して西国五カ国の大名になった毛利元就である。その遺産は子や孫によって引き継がれ、毛利家は西国八カ国を領有する大大名になった。

四年前、元亀四年（一五七三）七月に信長に追放された義昭は、その毛利家を頼って、再び打倒信長に立ち上がったのである。

信長は琵琶湖を中心として畿内、近国の流通を支配し、泉州堺を押さえることによって南蛮貿易を掌握している。

一方の義昭は鞆の浦を拠点として瀬戸内海の流通を押さえているし、毛利家はドル箱とも言える石見銀山を支配している。

その力は五分と五分。新しい時代に即した国造りを目ざす信長と、幕府の再興によって旧来の秩序を取りもどそうとする義昭が、がっぷり四つに組んだ戦いを展開することになる。

こうした視点に立たなければ、この年から天正十年の本能寺の変に至るまでの歴史を理解することはできない。

ところが従来の史書は、鞆の浦での義昭の活動についてきわめて冷淡だった。それは元亀四年に義昭が追放された時点で、室町幕府は滅びたという理解に立っていたからだ。

これが間違いであることは、近年の研究によって明らかにされつつあるが、問題はなぜそんな嘘が長年まかり通っていたかということである。

それはおそらく江戸幕府の史家が、家康が足利将軍家を敵として戦っていた事実を消し去ったからだろう。

江戸幕府は儒教道徳を国是とし、主君に忠、親に孝をつくすことを人間の根本とした。だから将軍に逆らってはならないと、有無を言わず家臣、領民に強要した。

それなのに神君家康公が将軍義昭と華々しく戦ったとなると、きわめて不都合である。そこで元亀四年に足利幕府は滅びたことにしてしまおうと、一決したようなのである。

後世に伝えられる歴史とはこうした一面を持つものなのだ。

これまでに述べてきたことを踏まえて歴史というものを捉え直してみると、語られる歴史の背景には語る側の人たち（集団としての人間）の持つ価値観が存在していることを感じ取ることができる。

こうした認識の下に歴史というものの意味を明らかにしようとするならば、いかなる価値観を持つ集団としての人間が語る歴史であっても、それらに共通する概念と言葉を見出す必要に迫られる。

いずれにせよ、歴史とは文明の発生、推移展開、衰退消滅、交代などを表現したものであり、その過程で人間が何を考えてどう行動したかを表現したものであると定義できそうだ。